



# 有馬頼義

430円

昭和44年3月24日 第1刷発行

著 者 有 馬 頼 義  
発 行 者 野 間 省 一  
発 行 所 株式会社 講 談 社  
東京都文京区音羽 2-12-21  
郵便番号 112  
電話東京(942)1111(大代表)  
振 替 東 京 3 9 3 0

---

印 刷 所 信毎書籍印刷株式会社  
製 本 所 黒柳製本株式会社

---

落丁本・乱丁本はおとりかいたします。

Printed in Japan

目次

密室の眠り

五

燃え、消えた

九

脱出

二三

ネバダの墓標

二七

埋没

三〇

装  
幀  
司  
  
修

密室の眠り



男と女が、結婚して、十五年の歳月が経った。子供のないのが淋しかったが、それはあまり真剣には考えなくなっている。子供が出来ないというのは、男か女か、どっちかに欠陥があるのか、夜の生活に何らかの意味でくい違いがあるのか。結婚して、五、六年は、男も女も、そのことはあまり考えなかった。子供が出来ないことを含めて、男が、女との性生活にある疑問と困惑を感じはじめたのは、結婚して十五年目位の頃であった。二人の結婚は、恋愛結婚であった。サラリーマンの男が、女のつとめている近所の喫茶店へ通い出してから半年目位から、個人的な関係が出来た。男が外へ誘って、女がついてきた。だから、女の方も、男を好ましく思っていたことになる。更に半年経って、二人は正式に結婚式を挙げた。少くとも、それから、二、三年は、二人は幸福であった。しかし、結婚生活というものは、むずかしいものだ。どこにもあることだが、男は昼間、会社で神経をすりへらして、アパートへ戻って来る。女は、男を送り出してしまうと、あまり用がなかった。テレビをみたり雑誌を読んだりした。女は極めて健康であった。女は次第に男を夜毎に求めるようになったが、それは女の罪ではない。ただ、男には、それが負担になりはじめた。

この、極めて日常的な、なんでもないようなことが、事件の発端になった。



結婚して十五年も経ち、会社でも相当の地位に坐ることは出来たが、世の中の男にもいろいろある。男は、女を愛していたが、彼自身は、あまり健康ではなかった。男は、学生時代、試験に追われ、卒業すると、就職試験にかけ歩き、二度ほどひどい不眠症になった。そのとき、はじめて眠り薬を買った記憶がある。古い記憶が、女の肉体に太刀打ち出来なくなったとき、よみがえったのは、何故だろうか。

学生時代、下宿の女あるじとおかしな仲になったが、薬をのむと、完全な行為は出来なかった。就職試験のときも同じであった。自分にそういう経験があったから、女にも同じだろうと、簡単に考えた。女は健康で、単純で、いとなみが終ると、いびきをたてて眠ってしまう。眠る人間に、眠り薬をのませる必要は少しもないのだが、行為の前にのませれば、何もしないで寝てしまふだろう、というのが男の着想であった。夕食後しばらくして、薬局で買ってきた眠り薬を、ビタミン剤と云って、毎日少量ずつ女に与えた。男は計画的であったが、女は全く警戒心を持たなかった。のませはじめてから一週間ほど見ていると、あまり効果がない。あいかわらず、少し眠いような濁った目をして、求めてくる。男はしばらく、自分では、市販の強精剤をのんだ。

一カ月位して、やっと、薬の効果があらわれてきた。毎日が一日おき位になったのである。「この頃、あたし、どうしてこんなによく眠れるのかしら」と女は不思議そうに呟いた。

「今のうちに寝ておくことだな。もっととしをとると、睡眠時間が短くなるよ」と男は答えた。

子供が出来ないということは、男の計画には無関係である。この計画を進めて行くために

は、妊娠してもらっては困る。薬で、女の欲望を少しずつおさえながら、一方で男は、いとなみのときに、自分が疲れない方法も考えていた。つまり、胃散や、メンソレタムを使って、女に早く終らしてしまふことである。快感のピークが高ければ、女は回数を要求して来ない。ここまででは男の計画は、成功していた。男は少くともそう思った。しかし、成功と同時に、別の意味での失敗が、その頃からはじまっていた。男が、もう少し伶俐なら、この状態を続けることを考えたに違いない。

男はしかし、別のことを考えていた。つまり、男には、別の女と交渉を持つほどの甲斐性がなく、もし男自身が、更に年々おとろえていくとしたら、女は、ほかの男を求めるのではないだろうか、と思った。恋愛結婚だし、十五年間、どっちも浮気をしていないのだから、ほんとうは、男は考えすぎたと云うべきだろう。男は、女に与える薬の量を、さらに少しづつふやしていった。

男は、研究もしていた。尿素系の催眠薬に、安定剤系統の薬を少量まぜると効果は倍加する。栄養剤の薬を買って来て、中身を、眠り薬にとりかえ、栄養剤の方は捨てた。女は、まだ、眠り薬をのまされているのを知らなかった。

約一年間、男は、その方法を続けた。その結果、女の方から求める夜は、週一回位に激減した。一年間というと、栄養剤と眠り薬の空箱の量は、驚くほどになる。女が、それに気付かなくなったのは、よほど、のんきだったと云わなければならぬ。男は、一カ月分の空箱がたまると、アパートの共同ごみ捨て場へ行って箱だけ焼き、ガラスの壘びんは遠くへ捨てに行つた。都心からかなり離れた新開地だから、その辺にはまだ、小川や、池が沢山あった。池の場合は、壘

のふたをしたまま捨てると、壘は水面に浮ぶので、中に水を入れた。そうすると沈んでしまう。小川の場合は、都心に近付くと地下になり、大川や海へ出てしまう。心配はなかった。

また一年経つと、少し変化が起った。

「変よ。あの薬をのまない」と女が云い出した。

そこで女は、また男を求めだした。男は試みに、女が自分と結婚する前に、自慰行為をしたことがあるかどうかきいた。十五年以上夫婦生活をしているから、そのくらいのことは平気で聞いた。

「あるわ」と、女は答えた。「最初は女学校の頃。その頃は、あんまりたのしくはなかったわ。でも、喫茶店にいた頃は、自分で考えて、いろんなことをしてみたのよ。変な男にひっかからないのには、むしろ、その方がいいと思つたの。三日もすると、腰の辺が、かっかっとしてくるの。結婚前にやめたけど……」

男は、女に、再開を命じた。

女一般について云えば、自慰行為の常習者は、男と行為をするよりもいいという人があるし、逆に、結婚して、ぼったりやめる女もいる。また、その両方が、結婚生活中も続いて行く女もいる。この時点で男が最も希望したのは、最初の例だが、女自身は、二番目の例に属していた。つまり、肉体的には男は、失望し、精神的にはまず成功だった。第三の例は、男の体力では更に耐えられなかっただろう。

「どうして、そんなことをさせるの？」と女はきいた。

「人にきいたんだよ」と、男は嘘を云った。

「三所攻めというのがあるが、夫婦が協力してやれば四所攻めというのも出来るんだと」

男は、口で云いながら、自慰はとも角、四所攻めなんか、とても出来やしないと云った。

さてしかし、男の考えついたことは必ずしも、完全には成功とは云えなかった。女は、女ざかりで、自慰だけでは物足りないと言った。

「四所攻めっていうのを教えてよ」と女は云った。

男は、もう一度薬でやり直すより仕方がなかった。そのころ、女はもう軽い中毒症状を起していたから、今迄の薬の量ではきかない。それで、量を少しふやし、寢酒と称して、日本酒のひやか、安ウイスキーでのませた。

この小説がつまらないのは、女が、馬鹿なせいである。女は、またしばらくは、男を求めることをしなくなった。男は、薬が、栄養剤ではなく睡眠薬だということを、女に知らせる時機について考えていた。この程度の中毒では、それを告げられたとき、女はおこり、薬を断ち、あるいは自ら病院へ行くか、町医者にかかろうとするかも知れなかった。眠り薬と知りながら、自分ではもうどうしてもやめられない、という時まで現在の状態を続けなければならないだろうと考えた。

「お酒って、いい気持ね。気が大きくなるし、希望がふくらんでくるのよ。よく眠れるし……」  
「そうだろう。寢酒を続けるといいよ」と男は答えた。

男は、酒をのまなかったが、ある夕方アパートへ帰ると、食卓に、酒の用意がしてあった。男はちょっとびっくりしたが、同じことだと思つた。二人で日本酒を二合のみ、寝る前に、女は薬をのんだ。すると、その夜、不思議なことが起つた。女は、男を求めなかったが、全然眠

れない、と夜中に云い出した。男は、考えた。違った現象が起つた理由は、一つしかない。薬より前に酒をのんだということだけだ。男はそれで、わかった。酒を先にのんではいけない。薬のあとで、酒をのまなければ、眠り薬はきかない。

「晩酌もいいがね」と男は早速翌日云った。

「大体二人とも酒のみじゃあないんだ。それに寝酒の方が、よく眠れるだろう。やっぱり元のようにしようや」

一週間それをつづけると、女は男を全く求めなくなり、そしてそのことに対して疑問も感じないらしく、男は助かった。この調子で行けば、男の計画も、うまく行きそうであった。

この話が、事件になって行つた過程で、重大なのは、男に、薬物中毒に関する知識が、なかったということである。

しばらく平穏な日々が続き、男は、体力を消耗しないですんだが、今度は、逆の現象が起りはじめた。つまり、男の方にも、欲望があつたのである。男は、毎晩よく眠っている女の寝姿を眺めて暮すようになった。まさしく、女が欲望を失つたとき、男は女に飢えはじめていた。

男は二、三日考えてから、薬をのませる前に、女を求めてみた。勿論女は応じた。しかし、驚いたことには、あれほど貪欲どんよくであつた女が、全く感動を示さなくなつてゐることであつた。女自身、そのことに疑問を感じていたかどうか知らない。からだをなすとき、妙に男と女の間は白けていて、男は、質問というかたちで、そのことを女にきくことが出来なかつた。

しかし、ペースは、そうしていれば男のものであつた。自分のしたことだからと、男は自分、その状態を続けた。そして少しずつ不満を覚えはじめた。男の最初の目的は成功したよう

であるが、しかし男には、そういう問題で、先を読む能力はなかった。女は、すっかりかわってしまった。男は、よそへ女を求めに行くことも考えたが、それは女に対して、少しひどすぎる仕打ちであると思った。プラスの代償として、なにがしかのマイナスを、覚悟しなければならなかったのだ。

男は、女の心身の状態が、薬の服用の前でもあとでも、大してかわらないことを知り、眠っている女を抱くことにした。この時点では、男は再びプラスを得た。全く、意志や感情のない女を抱くことについて、男は、ある種よろこびを感じはじめた。手も脚も、だらんとしている。目も閉じたままだ。女は眠っていた。だから、女のからだは、男の思う通りになった。これが普通の睡眠だと、途中で目をさますが、薬がきいているから、女に意識は殆んどない。あとでわかったことだが、意識が全くない、というのは嘘で、女は、自分が何をされているのか、かすかに知っていた。しかし、手脚を動かしたり、話をして抵抗したり迎合したりは出来なかった。そして、前夜のこととは翌朝になると、全く覚えていなかったのである。男は、当分、その状態をたのしんだ。その時の女は、冬であっても寒がらなかったし、夏になると、汗をかいたが、自分では始末は出来ない。男は、タオルを持って来て、女の全身をぬぐい、全裸の姿に見ほれたりした。女の肌はまだ若かった。薬のこととは無関係に、美しかった。男は、女を、ひっくり返したり、横を向かせたりした。ただ、もの足りないのは、反応がないことであつたが、それは仕方がない。求められて苦しかった頃のことを思えば、この方がずっと楽であつた。ぜいたくは云えない。

薬を使いはじめた最初の頃は、男が薬を女に渡した。しかしこの頃では、夜になると、女の

方から薬を求めた。

その頃男は、同じアパートに住んでいる友達から、自分が留守の間の女の状態を知った。友人の細君の話によれば、女たちのおしゃべりに、女はこの頃加わらなくなり、ひとりりで、部屋にいる、ということであった。一人で、部屋で何をしているかは、わからない。男はしかし、女が、このごろ妙に忘れっぽくなってきたことを感じた。つくろいものなどを頼んでおいても、いっこうに実行しようとししない。日曜日などに、そばについていて、用を云いつけなければならなかった。

まずその時点で、女は、他人とのつきあいをしなくなり、いくらか健忘症になったようであった。しかし、食事のことは、ちゃんとした。

更に半年も経つと、女は食欲不振を訴えはじめた。朝は一緒だが、男は、女が、昼、何を食べているのか知らない。夕食は一緒だが、女は、男のための食事は、ちゃんと用意したが、自分の分は、つくらなくなった。

「どうして食べないんだ」

「夕食に、おなかいっぱい食べたべると、眠れないのよ。でも、あのお薬をのんで一時間もすると、食欲が出て来るの。そのときのために、おにぎりをつくってあるわ」

夕食ぬき、薬の服用、おにぎり、という順序が、女のために用意された。

「ビタミン剤でも、習慣性があるんだわ」と女は云った。

女は、夜のことについて、自分がひどくかわったことを知っていた。だからときたま「ごめんなさい」と、男に云った。「このごろ、そんな気にならないのよ。浮気してもいいわよ」

「浮気なんかしない」と、男は、云った。「ほしくなれば、眠っているお前を抱いている。それで二人ともちようどいいんだ」

「そう。あたしたち、幸福ね」と女は云った。

女にしてみれば、そうだろう。ごく自然の生活をしているのである。ただ、それが正気であったときと、薬の世界にはいったときとの違いに過ぎない。意識の上では、女に、急激な変化はなかった。

女が食欲の不振を訴えたとき、男は、少し心配になって、会社の囑託医に、他人のことにして、睡眠薬中毒のことをきいた。医者は勿論、そういう人があれば、なるべく早く、専門家の神経科の医者に相談するようにすすめてから、紙切れに次のようなものを書いてみせた。

服用（薬物）⇨胃（食欲不振）⇨腸（働きがにぶくなる）⇨血管⇨心臓⇨動脈⇨大脳（皮質）  
⇨肝臓（一部分分解）  
麻痺作用）⇨間脳（睡眠中枢）（覚醒中枢）⇨肝臓（分解）⇨腎臓⇨体外へ排出

「自律神経の方から云うと、眠剤は、交感神経に属する臓器の作用を盛んにし、副交感神経支配下の臓器の働きを抑制します。いずれにしても、個人差はあるが、早く医者に相談した方がいいですね。特に、心臓に欠陥のある人はあぶないですよ」

男は、礼を云った。医者を書いた紙切れは、もらってきた。

女は、健康であった。内臓で、特に病気を持ってはいなかった。しかし、まず、胃に来たこ



とは事実だろう。あとのことは、素人にはわからない。死なれては困るが、この程度なら、大丈夫だろうと、男は思った。男はしかし、尿素系の睡眠薬と、安定剤を両方とも使っていたから、尿素系の薬と安定剤（自律神経）の自乗作用には、思い至らなかった。

男には、もう一つ問題があった。男がいつも睡眠薬を買っている薬屋のおかみさんが「お客さんのむんですか。少し多すぎますね」と云った。

睡眠薬遊びというのが、少年たちの間に流行してから、睡眠剤を買うのに、印鑑が必要になったが、男は中年であったので、薬局は大目に見ていた。それで男は、そのときから、一挙に五軒の薬局をまわりはじめた。初めての店では印鑑を必要としたが、二、三度行くうちに、いいですよ、と云われるようになった。一軒の薬局で買っていたものを、五軒にすれば、ひと月一回まわればすむ。薬の入手は、それで楽になった。薬局が、劇薬として、その売買を保健所に届け出ていることは知らなかった。しかし、実際は、その規則は、あまり実行されていない。男は知らなかったが、麻薬中毒患者の多くは、薬を自由に入手出来る医者や、病院の看護婦や薬局の経営者であり、薬局の場合、男のような客は、利用出来た。客に売ったかたちで、自家用に使うことが出来るのであった。開業医についても同じことが云えた。しかし、そういう世相について、男はまだ少しも恐怖のようなものは感じなかった。薬がたまりはじめ、男はいよいよ落着いた。

残っている問題は、女に、薬の内容を知らせるのを、いつにするか、ということであった。まだ早い、と男は思っている。もっと中毒症状が進んでからでいい。

男は、さまざまな実験をするようになった。たとえば、尿素系の薬だけにしてみたり、精神